

「ガネフォ」 (GANEF0)

ガネフォ出場 日本水球チーム

「ガネフォ」とは、第18回東京オリンピック開催の前年（1963年）11月にインドネシアのジャカルタにて開催された国際スポーツ大会で「Games of the New Emerging Forces」を略して G A N E F 0「ガネフォ」と言い、日本語に訳すと「新興国スポーツ大会」であります。

この大会は、ソ連・中国などの共産圏が中心となり、アジア・アフリカ・アラブ諸国の新興国が多く参加した「国際スポーツ大会」です。

なぜ、このような国際スポーツ大会が開かれたかと言うと、東京オリンピック開催の2年前の1962年にインドネシアで開催された第4回アジア大会において、インドネシア政府（当時 スカルノ大統領）が、イスラエルと中華民国（台湾）を招待しなかった事がきっかけとなり、I O C（国際オリンピック委員会）は、第4回アジア大会を正式大会として認めないとの方針を表明しました。そして1963年4月I O Cでは、インドネシアのI O C加盟国としての資格停止（オリンピック出場停止）を決議したのです。

その為、これに対抗してインドネシアは1963年I O Cを脱退し、同年4月下旬に ソ連、中国を中心とする社会主義国及びアジア・アフリカ・アラブ諸国に呼びかけて、オリンピックに対抗しうる 総合競技大会（新興国スポーツ大会）を開催する事を発表しました。

その大会が ガネフォ (GANEF0) であります。

ガネフォは、51か国 約2,700人が参加して、1963年11月10日から21日までの12日間 インドネシアの首都ジャカルタに於いて開催されました。日本選手団は96名で9種目（水球・陸上・柔道・卓球・フェンシング・バドミントン・ヨット・レスリング・ボクシング）に参加

し、メダル獲得数で日本は、金メダル3個、銀メダル9個、銅メダル9個を獲得し、51か国中6位の成績でありました。

ガネフォの開催国であるインドネシアは当時IOCを脱退しており、日本のJOC（日本オリンピック委員会）と日本体育協会は、非加盟国と試合することが出来ない為、「ガネフォ」に参加しない事を表明していました。

しかし、日本政府（池田首相）は、対インドネシアとの間に戦後の賠償問題があり、また今後の経済発展を期待して、インドネシアのスカルノ大統領との関係を良好であり続ける事を願っており、ガネフォへの日本選手団派遣を切に希望しておりました。

一方、日本がガネフォに参加しなければアジア・アフリカ・アラブ諸国の16カ国が、翌年の東京オリンピックのボイコットを示唆していました。

そういう状況下に於いて、私達「ガネフォ水球チーム」は、頭山立國氏（ガネフォ選手団 団長）の正義感に共鳴すると共に、日本政府の考え方に賛同して、ガネフォに参加する事としました。

しかし一方で、国際水泳連盟から日本水泳連盟傘下の選手が出場したと言う誤解を招きかねないので、そのような事にならないように私達は日本水泳連盟に脱退届を提出して、個人の資格で参加し、チーム名は「東京クラブ」として参加する事にしました。

ところが、日本水泳連盟は、私達水球メンバーを日本水泳連盟から除名処分しました。それでも私達は正々堂々と出場し、その結果インドネシアのスカルノ大統領が大変喜んでくれました。また、インドネシアの日本大使館を始め、在住日本人や日系企業の人達からも非常に喜ばれ、感謝もされました。

翌年開催された東京オリンピックには、過去最多の93カ国が参加（前回のローマオリンピックは83カ国）し、大成功に終わったとメディアは報じました。我々のガネフォへの参加が微力ながらも貢献できたものと自負しています。

しかし、ガネフォの参加問題や、政治的問題をめぐってインドネシアと北朝鮮が参加の意思表示を示していながらも、翌年の東京オリンピックに参加できなかったのは、とても残念な事でした。

また、ガネフォの地域大会である「アジア ガネフォ」は、カンボジアのプノンペンで1966年11月25日～12月6日に開催されました。

一方、1965年9月30日にインドネシアで起きた軍事クーデターによりスカルノ大統領が失脚し、中国でも文化大革命の影響でガネフォは、その後自然消滅してしまいました。そして、日本に於いてもガネフォの役員・選手等96名の集まりは、2周年祝賀会が目白の椿山荘で行われて以降は、開催されなくなりました。

しかし、私達水球チームの団結は固く58年以上過ぎた今でもガネフォ会は続いています。ただ残念なのは、行動を共にした同志の菅久尚武・浜野武人・田中信義・房野康滋の4名がすでに他界され、悔やまれてなりません。歳月の流れを痛感しております。特に房野君は、スペインに早くから移住し、スペイン水球界で大活躍すると共に、日本の水球レベルの向上にも貢献してくれました。しかし、2020年3月 新型コロナによりスペインにて帰らぬ人となりました。とても残念でなりません。

半世紀以上過ぎた今、参加した水球チームを始めガネフォ選手団全員の国家的偉業が将来の国益に叶い、歴史に留めることが出来る様に願うところがあります。

なお、ガネフォ水球チーム全員が日本水泳連盟への復帰が認められたのは、日中国交正常化が結ばれた後の1972年10月の事でありました。

そのようなガネフォに出場した事を 当時も 今も 私達は誇りに思っています。

以上